

尸羅波羅蜜

尸羅とは

以上布施について語ってきましたが、つづいて六波羅蜜の第二、尸羅波羅蜜について申し上げます。訳して「持戒」と言います。旧訳は性善とも言っていました。龍樹の大智度論には

「尸羅は秦には性善と言う。好んで善道を行じ、自ら放逸ならざる、之を尸羅と名く。或は戒を受けて善を行じ、或は戒を受けずして、善を行ずるも皆尸羅と名く。」とあります。即ち消極的には「悪を戒」め、積極的には「善を好み行う」ことであります。

大乘義章には、

「尸羅というは此れ清涼と名づく。亦名づけて戒となす。三業の炎、行人を梵焼するに非ざるも事等しく熱の如し。戒は能く防息す。故に清涼と名づく。清涼の名は正しく彼を翻するなり。能く防禁するを以ての故に戒となす。」とあります。法華玄談には、

「これ清涼というは、熱悩の因を離れて清涼の果を得るが故に。」

とあります。清涼の果とは仏果であります。尸羅とは、煩惱罪悪をはなれたる「清涼」であります。罪悪煩惱が我身を焼き人を燃やす熱であり火であり悩みであるに對して、戒はよくこれを消しとめて清涼ならしめるが故に、尸羅を、持戒又は清涼というのであります。持戒は因につけた名であり、清涼は果につけた名であります。

以下習慣に隨つて持戒の名を用いてゆきます。持戒とは、悪を制止し、善を好み修めることであります。

諸仏通誠の偈

支那唐代に有名な鳥ちやうかがぜんし禅師というお大徳がありました。ほんとうの名は道林禅師というのでありますが、何故に鳥がぜんし禅師というたかというかと、この方は秦望山しんもつざんに一生をおすごしになりましたが、この秦望山に大きな古い松の木があつて、それが枝を四方に茂らせています。そのまがり重る松の枝の上に、鳥が巢にいるようにすまっていたので、時の人がよんで鳥がぜんし禅師と言つたのであります。

ある時、この道林禅師の住んでいられる杭州へ、政治家としても又詩人としても有名な白樂天が知事となつて赴任して来ました。白樂天は秦望山の鳥がぜんし禅師に会おうと思つてやつて来ましたが、禅師が松の上にはいられるので、

「和尚、危ない危ない。」

と言いますと、禅師は言下に、

「汝の身こそ危ないぞ。」

とやられましたので、白樂天もすかさず

「我は大地を踏んでいるから危ないことはないが、和尚こそ樹の上だから危ないぞ！」

すると禪師は大喝一番

「煩惱の炎胸中に燃えさかり、心は変わり変わって止む時がない。汝の身、危険でないということが出来るか！」

鋭い禅機が光っています。煩惱の業火に焼かれ、無常の嵐に吹きたてられていたのでは、たとえ大地に起つていたつて安楽ではない。危険を危険と知らずに人に忠告して一本やられたのである。禪師は危険を危険として知るが故に、松樹まつの上に坐禅工夫に余念がないのである。樹上にも法界に普き大白蓮坐だいびやくれんざが見出せるのであります。

この道林禅師の一喝は確かに、一大警戒を一切衆生に与えたものであります。ひやりと冷や汗なくしてすみましようか。主客は正に転倒しました。白樂天こそ、危き火の上に坐し、禪師は金剛の聖坐に安住していられます。そこで白樂天は問わざるを得ない。

「如何なる是れ仏法の大意」

禪師答えて曰く

「諸悪莫作 諸の悪を作すこと莫く

衆善奉行 すべての善を奉行せよ

自浄其意 自らその意を浄くする

是諸仏教 是れぞ諸仏の教なり

と偈文を叫ばれました。これが有名な、いわゆる諸仏通誠の偈であります。

三品の持戒

諸悪莫作……もろもろの悪を作すこと莫く……これは戒の消極的方面でありまして、止悪即ち止持戒しじかいまたは守護戒であります。

衆善奉行……すべての善を奉行せよ……唯悪を止めるのみならず、進んで一切の善を奉行する、もろもろの善をつとめ行うこと。これが戒の積極的方面であつて、守護戒に対して撰善戒又は作持戒さじかいと言われます。止悪の反面たる修善であります。

自浄其意……自ら其の意を浄うする……悪を止め、善を修めることによつて、その心意を清浄にすることがその目的であります。即ち戒が清涼と言われる所以であります。

是諸仏教……是れぞ諸仏の教なり……と仏教の根本大綱がはつきりしたわけでありまして。

序ついでに申上げておきますが、この持戒をいわゆる三品にとかれてあります。即ち

守護戒……止悪

撰善戒……修善

撰衆生戒……止悪修善の言行によつて衆生を率いること

徳孤ならず必ず隣ありで、我一人善を修むるのみならず、進んで一切衆生に及ぼす力をもつのが善であります。持戒は自利の行でありますが、それが自利にとどまらないうで、自利が直ちに利他の行となるのであります。布施は全く利他の行でありました。しかし利他の行は、持戒以下の自利の行が徹底することによつて成就されるのであり

ます。これ布施のつぎに、持戒即ち修善が説かれる所以であります。修善は自利であると共に、それ自体利他を成就する根底であります。持戒なき布施は真の布施ではありません。

実践

話を鳥か禪師と白樂天の問答にかえします。諸悪莫作衆善奉行……とたたきつけられると、白樂天は言葉をかえしました。

「そんなことか、そんなことなら三歳の童子といえども知っている。」
すると禪師は直ちに

「三歳の童子でさえ知っていることでも、行うということになれば、八十歳の老人といえども難しいものである！」

とやられました。確かにうがっています。我等の言行まで出て来ない思想は要するに遊戯であります。知るに易くして行うに難きは善であります。仏教はこの諸悪莫作、衆善奉行の大旆(たいはい)を掲げ、微に入り細に入って、その実践の指導と、教学の方法とを教え、その機毎(きごと)に行い得る願行を施し、やがて求むる以上如何なる衆生も、迷いを離れて涅槃に至り得る道を示すのが仏教である。

禪師は今、仏教の実践性を明確に出されたのであります。持戒の教えは、我等自身の生活実践に対する直接の戒律であり、その指導であります。この七仏の通誠こそ、あらゆる仏教の根本大綱であって、これから細やかに一代仏教が出て来ると言っているのであります。

布施と持戒

前には、尸羅波羅蜜、即ち持戒について大体を申し上げました。持戒とは、諸の悪をとどめ、衆ての善を行ずる、直接我等の生活実践のことであります。

布施の教えは徹頭徹尾、利他の行即ち一切衆生、社会人生と我との関係を明らかにされたものでありますが、その布施が布施となるためには、その根底に横たわらねばならぬものが、ついで説かれてある持戒、忍辱、精進、禪定、智慧等の自利の五波羅蜜であります。そこで布施の大道に生きようとすれば、先ずその根底に持戒生活がなくはなりません。その生活が道義的持戒生活であつてのみ、その生活が布施となるのであります。即ち持戒によつて、布施を清め、且つ成就するのであります。

人に物を恵むということは布施にちがいません。けれどもそれが、不正な方法によつて得られた富である時、布施の意味は失われます。譬(たと)えば、偷盗(ぬすみ)によつて得たものを人に布施したつて、真実の布施にはなりません。又その生活が何等の持戒の意味を持たない人は、何時かは小悪から大悪に至つて、布施どころか、大善悪を社会に及ぼすに至ります。酒と女に放蕩をして、遂に公金を消費したとすれば、自損が直ちに損他することであります。かく考えますと、真実の布施行は、必然的にその人の生活が正しくなければなりません。即ち持戒が布施を成就し、清めるのであります。我等は私の生活が人類に対する布施行である先に、先ず私の生活の上に鋭い教えのメスを与えられなければなりません。

五戒

不殺生戒

釈尊は弟子がみ仏の教えに精進してゆくにあたって、修道の妨げとなり、教団の平和を破り、生活に墮落が来たりしないために色々な戒律をお定めになりました。その最も簡単なものが、五戒であります。その上に八戒、十戒、二百五十戒、三千威儀戒等が定められてありますが、全部を申し上げることは出来ませんから、先ず五戒、十戒について申し上げます。

五戒とは、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不飲酒戒、不妄語戒の五ヶ条の禁戒であります。

(一) 不殺生戒、出家した比丘、比丘尼の人たちは、水を飲む時には水濾袋みずこしやぐらでこして飲み、歩く時には錫杖しゃくじょうを鳴らし、夏の雨季には虫を殺さぬために外出せず、安居として夏季学校がはじめられ、肉を食うことに制限がある等、全て他の生物を殺さぬことに気をつけました。

生きとし生ける者は皆その生命欲を持っています。不殺生とは自ら生き、他の一切をも生かさうとする仏者の大慈悲であります。仏の大慈悲は虫けらにまで及んでいたのであります。

不殺生と言えば「殺すな」と消極的な表し方がしてありますが、その半面は一切を生かせという積極的の慈悲が動いているのであります。この一切を生かさず心こぞ尊い心であります。この心こそ、尊重さるべきであります。

けれども我等の現実生活に帰りますと、ものの生命をとらないでは、生活が出来ません。魚や獣を殺して人間生活は支えられています。これはやむを得ない事実であります。これはどう解決したらいいか、大乘の考え方がそこから生まれてきます。いづれは親鸞聖人の不断煩惱得涅槃の天地まで揚棄されなくてはなりません。殺すべからず、草一本、虫一匹殺すべからずとの鉄則はそのままに、しかも百千万億無量の殺生をなすとも亦救われる世界が大願の至極、他力真宗の世界であります。私は思います。一草一虫までも殺すべからずとの厳粛な声と、一切を殺しても助けられる、この二つのいづれを失ってもいけない、聖人はこの矛盾を抱いてやがて本願のお救いに統一を見出されたのであります。

それにつけて思うことは、無益の殺生であります。職業でもないのに、金と時間とに余裕がありすぎて、猟銃を肩にかけて、娯楽のために殺生するなどということは考えなくてはならぬことでもあります。それと共に徒らにこの不殺生戒を固執して、唯形の上で少しも殺さぬことなど実行しようとするのも亦、戒律に囚われた考え方があります。我等はその大精神を生かさずべきであります。

不偷盜戒

第二は不偷盜戒、即ちぬすむべからずという戒律であります。

偷盜、ぬすむということ、それは悪いことに違いありません。他人の所有であるものを、勝手に自分のものにするのであります。それがこそ行われたら窃盜（せつとう）であり、暴力で行われたら強盜であります。アメリカの専売かと思つていたら日本にも、ギャング団がはびこることが時々新聞紙に見えて来ました。万引き、詐欺をはじめとして、高位高官の疑獄事件等々、全く「石川や浜の真砂はつくるとも世に盜賊（どろぼう）の跡はたえまじ」で、いよいよ大胆に、いよいよ巧妙に偷盜が行われます。これは悲しむべき社会国家の実情であります。

ところが積尊の偷盜と言われたのは、こうして非合法の手段によつて、物をとることが偷盜であるばかりでなく、心に我欲の思いばかりあつて、その貪欲の心から、ものを無闇に集めることも亦偷盜であります。合法手段によつて限りなく物を集め所を有することも許すべからざる偷盜であります。

即ち積尊はものを貪愛しようとするその心そのものを悪とされたのであります。ある者はあり余る富の中に徒食し、人生の幸福を飽くことなく味わうに對して、ある者は働いても働いても食えないような社会状態が長続きすれば、そこに嫌な問題がおこるのは当然であります。個人的覚悟としては、渴しても盜泉（とうせん）の水を飲むべからず、又みだりに、飽くことなき欲心に驅られて白眼世（はくがん）をすねるべきではないが、一般大衆は、決してかかる道義的教養によつては動かない。されば孔子様すら「衣食足つて、礼節を知る」と言われました。人類の誰かが、合法手段によつて権力によつて大量的な偷盜を行う時には、大衆は、直接行動によつて小さな偷盜を行います。隨つて大衆の動向は、その社会が如何なる真相であるかを知らしむものであります。

偷盜そのものは決して行つてはならぬ罪悪であります。であるからそれを少からしめねばなりません。それには、個人の教養を深めて、眞実の人を作ると共に、社会悪を政治的に解決しなくてはなりません。この二つが並び行われなければ罪悪は決して少なくならないであります。人間はしかし機械的存在ではありません、万人が滔々として左する日に一人右にゆく意志を持ちます。如何に貧しくても、盜むことなくして正しく生きる人には衷心の合掌を捧げないではられません。

不邪淫

積尊は第一の殺生によつて、等活地獄が出現すると説かれました。等活とは等しく活きることを主張する地獄であります。殺生は食うために行われます。等活地獄は、食うことから生まれた地獄であります。

第二に黒繩地獄（こくじょうじごく）を説かれましたが、この黒い繩があつて、綱渡りをさせられ炎の中に沈んでゆく地獄は、殺生の上に偷盜を行う者がおちる地獄であります。即ち財物所有によつて生まれる地獄であります。世界は今、この二大地獄によつて苦しんでいると言つていい。だが問題はそれだけではない。

第三が、不邪淫によつて生まれる衆合地獄（一名、刀葉林地獄（とうようりんじごく））であります。性問題からおこる地獄であります。性の問題も亦人生あらん限りおこつて来ることであります。積尊は第一教団の人、即ち比丘、比丘尼に對しては絶対に異性から遠ざ

かることを命ぜられ、第二教団、即ち在家の信者には、一夫、一婦を守るべきことを教えられました。不邪淫戒がそれであります。

不飲酒

第四に説かれたのは不飲酒戒であります。酒を飲むこと勿れとの教えであります。酒と人生とは実に不可分な関係があるようであります。米国が禁酒を断行して、却つて種々な悪い社会問題をおこし、再び禁酒を解いたのを見てもわかります。釈尊は、五戒の一つにこれを説き、殺生、偷盜、邪淫に更に飲酒する者は、叫喚地獄きょうわんじじくにおちると説かれました。蓋し飲酒は、その行為そのものが罪悪であるというよりは、飲酒によつて、悪に大胆になり、無意味なる鬪争をおこし、その酔狂に乗じて、平素の怨みを晴らしたり、粗暴なる言語挙動を現し、人によつては暴逆なる罪悪すら犯します。かかる人格上の問題をおこすが故に酒を禁じられたのであります。心すべきことでもあります。

不妄語戒

第五は妄語するなどの教戒であります。妄語とは虚言うそをつくことでもあります。他人を欺いて自らを利しようとすることでもあります。口業に対する誠めでもあります。釈尊は、前の四悪に妄語が加えられた時、大叫喚地獄が生まれると説かれました。子供でも虚言をつきはじめたならば注意しなくてはなりません。必ず他に多くの罪悪がかくされてあるからであります。それですから言葉が誠であるためにはその生活 6 が正しくなくてはなりません。生活そのものが正しく、正しい信念に住している時、自らこの不妄語戒に住することが出来ましょう。

以上五戒は一番簡単なる戒律でありますが、我等の日常生活の上において一日も考えないではいられないことでもあります。我等はこの五戒の教戒の前に、静かに自己を凝視みつめします時、殺生、偷盜、邪淫、飲酒、妄語一つとして頭の上がる世界はありません。我等の本能我の急所をおさえてのみ教であります。形の上だけでもこれを守ることが困難であります。ましてや静かに内なる声を聞きます時、誠に無慚無愧むざんむぎ、破戒下品げぼんの極悪であります。極悪を觀するが故に聖人の信境に同じて如来他力の本願を仰ぐものであります。

十戒

前には五戒についてお話し致しましたから次には十善十悪、即ち十戒について申し上げます。

十悪の第一は、殺生、第二が偷盜、第三が邪淫であります。これは五戒で申し上げましたから略しておきます。以上の三悪は身業として身にかけてする悪であります。つぎは口業として口の悪が四悪説かれてあります。

両舌

第四は両舌とは二枚舌を使うことであります。これは離間語りかんごとも言われまして、甲には乙のことを悪く言つて甲の氣に入るように言い、乙には甲のことを悪く言つて乙の氣に入るように言うのです。甲と乙は相互に悪み合にくつて仲たがいをして敵になる、それにつけこんで自分がいいことをしようとするのであります。卑しむべき心事であります。

悪口

人を罵詈譎ばりざんぼう誘さうすることであります。人をそしめるほど自分の人格を傷つけることはありませんが、然るに人の悪口ほど言つて見たいものもありません。自分の人格は劣等極まつていても人の悪口なら平気で言えます。大無量寿経には、「そ言その自害害彼、彼此俱害ひしぐがいを遠離おんりし、善語の自利、利人、人我兼利を修習す」とあります。そ言とはそ悪な言葉です。そ悪そわるい言語が、自害害彼——自らを害し、彼を害する、彼と我と共に傷つけるのを遠離して、善語の自利利人——自らを利益し、他の人を利益する、人と我と俱に利する言を修め習えとのみ教えであります。

一言が自らを傷つけ、他を傷つけます。特に妄みだりに他人を裁くが如きは謹むべきであります。

妄語

つぎは妄語であります。嘘を言うことであります。悪い心から他を欺くことであります。ありもしないことをあると言つたり、人をいい加減にゴマ化したり、悪事の7為される処、必ずこの妄語が盛んに使われます。嘘つきだということが一度わかれば世間の信用を失い我が身を亡ぼすものであります。

綺語

第七は綺語きごであります。言葉をたくみに飾りたてて、他人の意を迎えて己の利をはかろうとすることであります。孔子様が論語ですでに、「巧言令色、鮮すくなし仁じん。」とお述べになつたように、言葉を美しく巧みに飾りたてて顔色を造つて、ぺこぺこする者に仁まじしはないものであります。唯考えねばならぬことは、礼儀が厚いこと、その謙讓な、やさしい心が自然に美しい言葉となつて出たのは決して綺語ではないことであります。野卑な言語を使つていことが、正しい道では決してないことです。顔を和らげ、美しい言葉を使うことを、経には和顔愛語わげんあいごと言つてあります。戒むべきは、心にもない飾り言であります。みだりに人を讃めるのも亦悪いことであります。

以上の、両舌、悪口、妄語、綺語が口の四悪であります。よくよく内省しますと、凡夫の口は何を語つているのでありましょうか。媚びへつらう言葉、呪い、不平、自慢、偽、愚痴、裁く語、罵る声、そうした悲しい言葉ばかりが連続して出ているのではありますまいか、朝から晩まで、ほんとうのことをどれほど言ひましょう。静かに考えると誠にお恥ずかしいことであります。

そうしたそらごとたわごとの中に南無阿弥陀仏のお念仏が恵まれることは有難くも嬉しいことであります。南無阿弥陀仏にはみ仏の眞実が流れていて下さいませ。

この真実の声をじつと聞いていますと、いよいよ一切の言葉がそらごとたわごとであることが感じられます。おそらくこうした絶対の真実にふれなければそらごとの塊りであることも知らないで、真実を語っているように誤信し、都合の悪い時にはいよいよ弁疏して、悪の上塗りをして恥ないであります。真実の言葉を出せとの聖誠いままじめがあり、真実の言葉を廻向されるが故に、沈黙して私の言葉が何であるかを細々ながら知らして頂くことであります。

貪欲

第八は貪欲であります。

人間は生きているが故に欲望の塊かたまりであります。睡眠欲、食欲、この二つの満足を与えねば肉体は死に至ります。それだけが適当に満足するとさらに、財欲がおこります。財産が出来る、誉められたい、名が得たい名利欲、それに更に男女異性を恋慕う色欲しきよく、これがあるが故に子孫を残すことが出来ます。以上を五欲と言いますが、小さく考えてゆけば、美しい衣装がほしい、遊びたい、聞きたい、映画が見たい、劇が見たい。ダンスが躍りたい、歌を歌いたい。音楽が聞きたい。魚がつりたい。数えてゆけば数限りがありません。根本をつきとめれば、生きたい生きたい、美しく、明るく面白く幸福に何時までも生きたいとの生命欲であります。

若しこの欲望を全部なくしようとすれば死ぬるより外ありませんが、欲の上に貪るむさぼという字がつきますと貪欲となります。仏が誡められたのはこの貪欲であります。正しくない欲望であります。現職の警官が銀行の支店長を殺して莫大な金を盗んだ、それは物に対する貪欲であります。けれどもその底には、女に対する恋愛があり、芸者を落籍さしてやりたいとの愛欲がありました。皆貪欲の然らしむる所であります。欲望を正しく持てとの聖誠であります。一度正しからぬ欲望の奴隷となるや、身の破滅を来して、涅槃の道を求める心もとぎされてしまいます。心すべきことであります。けれども一度深い内省の眼を開き、仏智に自照されます時、誰か貪欲の徒でないものがあります。祖聖は「悲しき哉、愚禿鸞ぐとくらん、愛欲の広海に沈没し名利みょうりの大山だいせんに迷惑じょうじめして定聚じょうじゆの数に入ることを喜ばず、真証の証にちかづくことを快たのしまず、恥づべし傷むべし。」と悲歎されてあります。これ全く仏智に照破された凡夫の真相を諦観して下さったのであります。如来清浄光のみ救いにふれての深い懺悔であります。

瞋恚

第九は瞋恚しんいであります。腹立ち怒る心であります。貪欲の心には必ず瞋恚はつきものであります。悲惨にも、嫉妬にも復讐心にも瞋恚はつきものであります。貪欲の心はそのまま通るものではありません。裏切られ、拒まれ、碍げられると、怒りの炎は猛火の如く、身を焼き心を燃やして、眼を怒らし、顔色を変え、醜い相を現して是非善悪もわからなくなり、怒りの心の狂うまま振る舞うておいて大悪をひきおこし、後になって、とりかえしのつかない後悔に泣くのであります。

「怒りは敵と思え！」体内の白血球は変じて毒素となり、呼吸、汗、お乳の中にまで出て来るそうです。怒った時は、その怒りを言葉に出さぬよう、行動に表さぬように

心すべきであります。孔子もその愛弟子に対して「顔回怒をうつさず」とお褒めになつています。怒る心が起きた時は、静かに己に帰り、自分の悪を悪と知るべきであります。必ず深い懺悔が生まれて来るであります。怒りを和らげるものは、慈悲であります。慈悲の心はよく忍耐します。ですから経には「慈忍」の文字が度々現れます。慈悲なるが故によく忍ぶのであります。身に大事を有する者も亦怒りより遠ざかります。韓信の股ぐりや、木村長門守重成のよく侮辱を忍んだことは有名であります。

愚痴

第十は愚痴であります。ものの道理にくらく、痴おろかな思いに悩む心であります。無明とか、惑とか痴とか大体同じであります。深くいうならば、生死の迷いは無明から起こります。釈尊は生死流転の底に、無明を発見され、その無明を智慧光によって打ち破つて、正覚を成就されました。その無明が愚痴となつて出るのであります。つまりぬことに悲しんだり、とりかえしのつかぬことをくよくよ思つたり、我と自ら暗路を歩む、人生の日漸く暮れんとして愚痴ばかり言つてゐる老人があります。愚痴は一切の善や徳を滅します。更に邪見となり、我慢となつて諸の善徳をうしないます。多くの罪悪は愚かであるよりおこると言つてもいい。貪欲も、瞋恚も愚痴をはなれてはな

三毒

以上の貪欲と瞋恚と愚痴とは意業として心のはたらきであります。仏はこれを三毒とおよびになりました。この意の三毒の煩惱こそ、表れては身業口業の悪となる根本であります。仏の光明は、貪欲の上には清浄光、瞋恚の炎には歓喜光、愚痴の心には智慧光となつて照護して下さるのであります。我等はこの光明摂取の中に三毒を三毒と知り、一切を超えて、如来清浄の大信に生かされるのであります。

以上十悪についてお話しを致しましたが、十悪を出でて十善に生きよとの聖誠であります。十善戒の一事が深く人生に根ざしてのみ教えであります。十悪の我を見るにつけて、南無阿彌陀仏の絶対善の廻向を喜ばないではいられません。聖人は口伝くでんじょう鈔に、

「悪業をば恐れながらすなわち起し、善根をばあらませども得ること能わざる凡夫なり。かかる浅ましき三毒具足の悪機として、われと出離みちたに途絶みちたえたる機を撰取したまわん為の五劫思惟の本願なるが故に、ただ仰ぎて仏智を信受するに如かず。」と仰せられました。悪業をばおそれながらすなわち起し、善根はあらせたいと思いつつ得ることの出来ない三毒の凡夫である。ただ仰いで仏智を信受するに如かずとは、びつたりとお受け出来るみ教えであります。

「我が心にまかせずして我が心をせめよ。仏法は氣のつまるものかと思えば信心におんなくさみ候」

との蓮師の御慈訓も有難いことであります。十善の人たらんとすればこそ、十悪の凡夫も知れ、十悪の法然坊と仰せられる大師源空上人と肩をならべて往生の大道を生きぬかして頂くことが出来るのであります。

なげやりな心

続いて持戒について申し上げて来ました。釈尊は出家のお弟子、在家の信者、それぞれに厳しい持戒を守るべきことを教えられました。前に申し上げた、五戒十戒をはじめとして教団に属するものには、これを行わしめて涅槃の道に至る妨げをとりのぞいて行かれました。

現代は誠にこうした戒律的の生活に遠ざかっているようであります。放縦や我儘が大手を振って通つて、正しい生活を切念する人こそ、色々な悪評を受けるかに見えます。親鸞聖人の悪人正機の宗教ですが、過去には、人間の本能まかせの出鱈目生活がそのまま無反省に許されるのが、他力真宗であるかのように間違えられました。これはきわどい所で、如来の本願がふみにじられた自然外道悪無碍の邪道にすぎないのであります。この度講習会で講じました五念門の宗教なども、如来本願の生きた力が我等の上では、礼拝合掌、称念讚嘆、願生浄土等の身、口、意の業として生活形式として活躍して下さるのであります。

私は蓮如上人の

「我が心にまかせずして、我が心をせめよ。仏法は氣のつまるものかと思えば、信心におんがぐさみ候。」

とのお言葉を感佩致さずにはいられません。善人にならなければ救われないうように思うのも、如来を見失うた者の疑いでありますが、しかしだれも放縦な生活の中にも、信心の喜びはあり得ません。なげやりな心にまかせないで、正しい生活を念じて、我が心をせめる者こそ、氣のつまらない信心の天地を味わって頂けることであります。

自然と規律

自然の相を凝視しますと、乱雑に見えるような中にも、巖然として一定の規律が動いています。

春、夏、秋、冬の四季の移りから、大洋に一日二度の潮の満干、水は下に流れ、星は天に輝く、地球は二十三度半の傾きをもつて、地軸を中心に自転しつつ、太陽の周囲を公転する、何を見ても規律整然たるものであります。

天地自然に規律があります。人の世界に規律がなくしていいでしょうか。釈尊は、天地の法則、即ち法を体得して仏になられ、その法を教として説かれたのであります。教は教であります。その法が人間のふみ行うべき道となり、規範となり、更にそれがその人になりきった時、徳と申します。徳も亦徳であります。その徳ある人は、一切人の模範であります。範も亦範であります。法典と言えは人の行うべき道を示したものの、即ち、法も典も「のり」であります。誠に宇宙も法で動き、人も法で生く、法をおいて道はありません。

これは慶澤和尚から聞いた話であります。網干の盤桂和尚は、その徳が高く、道俗共にその許に馳せ集まつて教えを聞き、尊敬します。段々と盤桂々々と、評判が高くなって来ました。すると一人の僧がいて、名声の高い和尚を日頃悪んでいました。或時遂に盤桂のもとにおしよせて来ました。盤桂が何だ、一議論ふきかけてやりつけ、その名声をおとしてやろうとするのであります。盤桂はその人を招じ入れて座敷に通し、座蒲団をすすめ、茶を出しました。客人は盤桂をなじり責めました。すると和尚は、

「盤桂々々と皆様が言つて下さるのは、誰が賢いためではありません。私は何時も、天地の道理を尊びます。どうかして私の日暮しと天地の道理と一つにしたいと念じております。人々が盤桂々々と言われるのは、その天地の道理を敬われるのであります。私が賢いわけではありません。早い話が、今日、そんなに怒つていなさる貴僧も、盤桂という通りにお従いなさつたではありませんか。」

すると「俺が何時お前に従つたか」という風情です。

「貴僧は玄関で、お上がり下さいと言つたらお上がりになり、お通しする部屋に通られ、お坐り下さいと言えよその通りお坐りになり、お茶をと云えよお上がりになる、私という通りに随つていられる。多くの人が衲の言うことを聞いて下さるのは、その通りです。天地の道理に随われるので、別にお怒りになることはありません。」

真の自由

人は自由を尊びます。しかし自分一人のみの自由を求めようとするれば、放縦になります。自分が自由を求めるように一切の人も自由を求めます。自分の自由を尊ぶならば全ての人の自由も尊ばねばなりません。ここに人類の間に、何時しか、規律が出来て、社会の秩序を保とうとする所以であります。社会国家に明確な統制と秩序とが生まれるのであります。国家の秩序が乱れない国は自由であり、規律のない国は不自由であります。国家的秩序が整然としないために、国民は不安と、不自由に何時も苦しまなければならぬ実例は、眼前に横たわる支那であります。

個人の自由のみを主張して、真の自由を獲ようとするのは、清水の中に足を入れて、自分一人が濁らない水を飲もうとするのと同じであります。

世界は今、大きな悩みの中におかれてあります。これは、過去人類、各国家がとつた誤れる自由主義の清算だといつても差し支えありません。広い土地を少ない人数で独占したり、あり余る富を、自由に独占したり、戦勝の結果、無法な重い負担を一国に強いたり、そうした世界的無秩序なやり方が世界を濁らしたのです。しかも世界各国は、ますます自国の自由繁栄のみを求めて、却つて自縄自縛、苦悩のどん底に墮ちようとしています。かかる状態では、誤れる力をこらすためには、正しい力が動くことも亦やむを得ませぬ。

正法が世界の規律となる日、人類は、真の自由に近づくとあります。

私はかつて、江田島の海軍兵学校を參觀したことがあります。朝起きて、夜寝る迄一分時も自由はゆるされてありません。「二歩以上前進の時には駆け足の姿勢をとる

べし」と言った様子で、教室から教室へすら隊をつくってゆきます。寝具の整理が何十秒、こうした、規律が骨となり肉となって遂に日本軍隊の真の力となります。日本軍隊の強い所以は、決して偶然ではありません。

凡そ、大にしては、世界、国家、社会、小にしては、一学校、一会社、一団体、一家庭においてこの規律の重んぜられる所にだけ、真の仕事は成就されてゆきます。

この故に我等は先ず、道義を生きてゆく人とならなければならぬ。

真実の布施、布施のみによって成就しないで、持戒によって布施は布施たる事が出来ず。自己の正しい生活のない所にどうして布施がある。正しい生活の全てを布施してのみ、布施は生きる。

念仏道は、持戒以上の持戒であります。自然の道義に生きることあります。何故なれば、一切の善を揚棄して、そこに打ち出されるのが念仏道だからであります。

持戒のお話しをおわります。